

Senri Sonoyama (園山千里<sup>1</sup>)  
ORCID: 0000-0002-7146-8298

『蜻蛉日記』における夢  
**Dreams in *The Gossamer Years***

DOI: <https://doi.org/10.14746/sijp.2024.72.4>

**ABSTRACT**

Science has yet to resolve many mysteries about dreams, such as why people dream and how dreams are created. Therefore, dreams are categorized as beyond imagination, different from reality. When dreams are expressed in the form of literature, they take on a more fantastic atmosphere. In this article, I focus on dreams in ancient times and consider what it means to use dreams as the subject matter of literature. There have already been many prominent studies on dreams in ancient times, including Saigō Nobutsuna's *Ancient People and Dreams* (Heibonsha, 1993). Utilizing these studies, I focus on the *Kagerō Nikki (The Gossamer Years)*. I conclude that the four waka poems about 'dreams' in *The Gossamer Years* were an exchange with Tōshi, a person she could truly trust, and that for Michitsuna-no haha they symbolised a peaceful life in the real world.

**KEYWORDS:** Heian period, *The Gossamer Years*, dreams, *zōto-ka* (gift poem)

はじめに

古今東西を通じて、「夢」にはどのような意味があるのか心理学や脳生理学の観点から注目されてきた。フロイト、アードラー、ユングなどにより、「夢」は欲望や権力、集団無意識のあらわれであるとされた。現在では、レム睡眠の発見により「夢」のメカニズムや脳の機能についてさらなる研究がおこなわれている。それらの研究の成果と合わせて、古代から人々が「夢」を文字に残してきたことも考える必要があるのではないだろうか。「夢」をモチーフとす

---

<sup>1</sup> 国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科教授・ポーランド国立ヤギェロン大学文献学部東洋学研究所日本・中国学科准教授。平安時代の物語と和歌の研究をおこなっている。Contact: [senri.sonoyama@uj.edu.pl](mailto:senri.sonoyama@uj.edu.pl).

る多くの文学が世界で生まれている今、「夢」を文字に残すことの意味をあらためて思考する必要があると考えている。

本論では『蜻蛉日記』にみられる「夢」の一部を考察する。特に、作者である藤原道綱母が夫である兼家との関係を嘆き日記を書いたと述べる『蜻蛉日記』の序文と、兼家の妹登子との「夢」をめぐる贈答歌について考察していく。

## 1. 『蜻蛉日記』の「夢」用例

平安時代の和文の作品において、「夢」はどのように描かれるのであろうか。『竹取物語』『古今和歌集(仮名序)』『土佐日記』には「夢」の言葉や、みたであろう「夢」の引用さえもない。「夢」の引用から文章表現上の特色を検討する山口康子は、『源氏物語』をはじめとする十一作品を対象に「夢」の引用を調べたところ、『源氏物語』以前の作品(『伊勢物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『枕草子』『紫式部日記』)で「夢」の引用がみられたのは『蜻蛉日記』のみであると示唆する。最初にみられる『伊勢物語』では歌語としての「夢」であり、「「夢」はまず和歌の世界に用いられる形で平安和文の中に位置づけられたものと思われる」(山口1988:6)とも述べている。この示唆的な指摘を踏まえて、本論では、具体的な「夢」の引用がみられる『蜻蛉日記』にふれた後、『蜻蛉日記』の和歌世界にみられる「夢」について考察する。

『蜻蛉日記』の「夢」に関連した先行研究では、和歌に詠まれる「夢」は具体的な「夢」の引用ではないという理由で、「夢」の引用数から外される。先にあげた山口論文でも、「上巻には「夢」を詠む和歌4首(贈答歌2組)があるが、実際の夢は1例も引かれなない」(山口1998:7)として、「夢」の数には入っていない。たしかに現実の「夢」ではないかもしれないが、和歌に「夢」が詠まれることの意味を考えることも必要だろう。いわば等閑視されてきた『蜻蛉日記』における和歌の「夢」に光をあてるのも本論の目的である。

## 2. 『蜻蛉日記』にみられる「夢」

『蜻蛉日記』の作者は、藤原道綱母である。藤原兼家と結婚して、道綱という子をもうけたので、道綱母と呼ばれる。絶世の美貌と歌才を持つ道綱母であるが、兼家は道綱母と結婚する前には、同じく受領の娘である時姫と結婚して、道隆という子どももいた。この

当時は一夫多妻の風習があるため、妻が何人もいるのは不思議なことではないが、道綱母は好色の兼家を相手にしながら苦悩の人生を過ごすことになる。道綱母は、ある日兼家のあまりにも傍若無人な振る舞いに愛想を尽かし、山寺に籠ることを決意する。現代の感覚でいうと、離婚までとはいわないものの別居を決意するような状況である。次の引用部分は、鳴滝般若寺に行く前の、精進中の勤行の出来事である。

二十日ばかり行ひたる夢に、わが頭をとりおろして、額を分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、わが腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これを治せむやうは、面に水なむいるべきと見る。これも悪し善しも知らねど、かく記しておくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも用ゐるべしや、用ゐるまじやと、定めよとなり（木村、伊牟田 1995: 223）。

二十日ばかり勤行を続けた日に、ある「夢」をみる。一つは自分の髪を切り落として額髪を分け、尼姿になるという「夢」である。そして、また七、八日ほどすると、自分の腹の中にある蛇が動き回って内臓を食べる「夢」を見て、それを完治させるためには、顔に水を注げばよいという治療方法まで「夢」に見る。

二つの「夢」について傍線部「悪し善し（吉夢か凶夢か）」は自分にはわからないと二度も述べていることから、見た「夢」で吉凶を占う意識があったことがわかる。わからない、というのは精進中で夢を判断する専門家を呼んで判断させることが叶わなかったことを述べているのだろうか。それとも、わからないと何度もいうのは、それほど「夢」の内容について無関心なのであろうか。

「夢」は時間も空間も超えた何か人間の力を超越したようなイメージが古代の日本にはある。そのため「夢合せ」や「夢解き」をする人物も存在した。

先の引用部分は、道綱母が「夢」を信じていいのか、今後の将来にどのような影響を与えるものなのか、想見する部分であった。また、これらの「夢」を記すことで、道綱母の最後がどうなるかを、実際に見聞きする人が、「夢」や仏を信じるに足りるものか、判断して欲しいとも記してあった。「夢」のお告げはすなわち仏のお告げでもあり、その仏のお告げも果たして信じるに値するものであるか、

それらは一切自分にはわからないので後人に委ねるという書き方である。つまりすべての評価は第三者に委ねる、という文章である。次にあげるように、

自分の今後のなりゆきを証拠として、夢や仏がどこまであてになるかを判断してほしい、と書いているが、彼女にとっては、これらの夢が吉夢であっても悪夢であっても変りはないと思う絶望的な感懐に基づく自虐的な言説（木村、伊牟田 1995: 223）

と「自虐的」な姿勢をみる解釈もある。兼家との関係に疲れ、世の中に対してやりきれない気持ちが、「夢」や仏について信じる気持ちを削いでいるのだろうか。この箇所は勤行中でもあるということも忘れてはならないだろう。しかも、物思いのない生活に憧れて出家を考えている時期の、いわば逃避としての逗留である。

『蜻蛉日記』の物詣の記事に着目した大倉比呂志は、上巻から下巻における物詣をみると下巻には宗教的意識の片鱗もみえないことから、「道綱母にとって仏道とは兼家との苦痛的な関係に立たされた時に発動する一種の〈アジュール〉であったと語られている」（大倉 1990: 252）と述べている。仏をどこまで信じることができるか、という表現自体が兼家との苦悩から解放されたいという心の迷いを示したものであるのかもしれない。

金子富佐子もこの箇所のくだりについて、

『蜻蛉日記』は「夢」をあくまでも現実生活とは別次元の事象として捉え、かつ古代社会において絶大な信憑がおかれていたであろうその「告げ」（予言性）に対しても、決然と懐疑的な姿勢を示している（金子 2000: 245）

と述べ、「夢」と「現実」とを弁別する執筆態度をとる「日記」という方法を選択した、道綱母の信望と自負がうかがえると示唆する。これは後にも述べる『蜻蛉日記』の序文との関連も、視野に入れて考えるべき点であろう。

ところで、『蜻蛉日記』において「夢」はどのようなタイミングで登場するのだろうか。金子真理子は『蜻蛉日記』と『更級日記』との「夢」を比較する論文で、『蜻蛉日記』の「夢」は兼家との関係に思い悩むときだけにみられると指摘する（金子 1979）。兼家との関

係が円滑であったり、苦悩から解放され悟りの境地に至ったりする時には、「夢」は出てこないのである。

道綱母は、この精進の出来事のさらに前には石山寺にも参詣している。訪問が途絶える兼家への対応に悩み、身近な人にも知らせず、こっそりと参詣を決意する道綱母である。賀茂川を経過した際、賀茂の河原では死人が転がっているとも聞いたがそれさえも怖く思わない。しかし、栗田山では心乱れて涙をこぼす。普段付き合うことのない下人たちの無礼な振る舞いを非難しながら、ようやく逢坂の関を越えて打出の浜に辿り着いた時は死にそうなくらい疲労困憊であったが、なんとか無事に石山寺に到着する。その石山寺でも「夢」を見ていた。この場面は『石山寺縁起絵巻』にも描かれる有名な一段である。

さては夜になりぬ。御堂にてよろづ申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろみたるに、見ゆるやう、この寺の別当とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て来て、右のかたの膝にいかくと見る。ふとおどろかされて、仏の見せたまふにこそはあらめと思ふに、ましてものぞあはれに悲しくおぼゆる（木村、伊牟田 1995: 208-209）。

夜を通して泣きながらお祈りをしているところ、夜明け前についまどろんでしまう。その時に見たのが、寺の別当と思われる法師が、銚子に水を入れて持ってきて、自分の右の膝に注ぎかける、という「夢」である。この「夢」が何を意味するのかわからないが、「夢」を神的なものとして捉え、仏がみせてくれたという書き方をしているのは確かである。まるで「夢」を神仏からのメッセージとして受けているかのようだ。この「夢」に仏の慈愛を感じ、それがより一層心の平安を抱けないわが身には辛く、恐れ多さを覚えることになる。

石原昭平は、傍線部を付けた「ましてものぞあはれに悲しくおぼゆる」には孤独や不安定さがあるとして、

夢が精神を支えるよすがとして念じつづけ、未来の運命を託するという開かれたものでなく、あくまで鬱屈しつつ、内面的な悲哀に閉じ込められてゆく夢なのである（石原 1977: 103）。

と、夢想的や浪漫的な志向を持つ「夢」ではなく、絶望の後の一縷の望みでしかない「夢」の様相を読んでいる。

### 3. 序文との関連性

『蜻蛉日記』の「夢」は序文との関連から考えるべきだと思われる。

かくありし時過ぎて、世の中にいともものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る人ありけり。かたちとても人にも似ず、心魂もあるにもあらで、かうものの要にもあらであるも、ことわりと思ひつつ、ただ臥し起き明かし暮らすままに、世の中に多かる古物語のはしなどを見れば、世に多かるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上まで書き日記して、めづらしきさまにもありなむ、天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし、とおぼゆるも、過ぎにし年月ごろのこともおぼつかなかりければ、さてもありぬべきことなむ多かりける（木村 1995: 89）。

『蜻蛉日記』の序文の一文は、三人称形式で表しており、「一人の女の人生としての日記を跡づけようとする物語的表出」（犬養 1982:9）だといわれる。「世に経る人ありけり」については「世の中」「世」は俗人の世界をも意味するから、裏から見れば、出家してもあながち不自然ではないが世を捨てずにいるという意がこもっているとも見られなくもあるまい」（柿本 1966: 14）という解釈もある。さらに、「世に」や「世の中」が多用されることについて、この語は「近接同語」で『宇津保物語』にもよくみられることから当時の文体の特徴だとも考えられている。類似した語が何度もみられることから「推敲不足」（同）という批評もあるが、繰り返し登場することに意味を見出すこともできるのではなからうか。また、「世」の多用が当時の文体の一特色というだけではない可能性を探ってみたい。

ここで着目したいのが序文にみられる「古物語」への言及である。作り物語を中心とする当時の物語作品を「古物語」と述べ、それらとは異なる自らの身の上としての文章形式、つまり日記を書くという明確な意識が述べられている。上村悦子は、

この序には、はっきりと古物語と自己の書く日記との異質性を述べ、そらごととして前者の伝奇性・浪漫性・非現実性・架空性が指摘され、それに対立して、この日記では自己の実人生に取材したきわめて現実的な内容のものを書くという宣言を作品

の主人公にさせている。こうした古物語を意識して批判したものは今までに見当たらない（上村 1978: 27）

と、兼家との結婚生活の苦悩から自己を救済するための一種の役割として、日記を綴る序文を位置づける。「世の中」や「世」は、俗世界にはかなく生きる道綱母自身の人生そのものである。「世の中」や「世」の多用が序文にみられるのは、当時の特色ということだけでなく、我が身の人生への追憶が幾度もおこなわれる証である。その行為を伝統的な「古物語」とは異なるかたちで表現して、日記という文学形式を新たに用いるのが『蜻蛉日記』なのである。「天下の人の品高きやと問はむためしにもせよかし（この上なく高い身分の人に嫁した女の生活はどんな実態なのかと問われたらその答えの一例にでもして欲しいと思われる）」には、我が人生を日記として公表する、確固たる執筆意識と文学への自覚がみられるのである。

#### 4. 和歌にみられる「夢」

ここでは和歌の世界にみられる「夢」について考察する。まず、和歌によまれた「夢」の一例として、有名な小野小町の歌をあげてみる。「夢」で逢うということが主題となっており、『蜻蛉日記』における和歌の「夢」との関連性がみられるからである。

思ひつつ寝(ぬ)ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚(さ)めざ  
らましを（『古今和歌集』恋歌二・552）（小沢、松田 1994）

作者が恋い慕う気持ちに焦がれながら眠りにつくと、そこに相手の姿が「夢」に出て来る。恋しい人を思いながら寝たので「夢」にあの人が出てきたのであろうか、それなら目覚めなければよかったのに、と実際には会うことができない人との「夢」での儚い逢瀬を遂げる恋の歌である。「夢」から覚めて現実に戻った後も、相手の面影を微かに感じると同時に、現実ではなかった無念を抱きながら「夢」の余韻をあらわす歌である。『古今和歌集』は続けて小野小町の歌をあげる。

うたた寝(ね)に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめて  
き（『古今和歌集』恋歌二・553）（小沢、松田 1994）

Senri SONOYAMA

「夢」のなかで偶然恋する人と会えた和歌「思いつつ」の歌意を受け、恋しい人と会うためにはかない「夢」を頼りにするようになった心が詠まれている。小野小町が生きていた時代、恋する人を「夢」に見るのは夢見る人の心に恋の思いがあるので現れるのだけでなく、相手も自分を強く思うので「夢」の中にまで現れたという考え方があった。「夢」には激しい恋心によって魂を引き付ける力があり、異次元での逢瀬も可能にする霊的な観念も生み出されたのだろう。小野小町の和歌は、「夢」でしか会えない嘆きを歌に込めたのである。

次に『蜻蛉日記』上巻にみられる「夢」を詠む和歌四首（贈答歌二組）を考察していく。これは西の対に退出した登子（とうし）との贈答である。登子とのやり取りはすべて和歌であり、時期をずらしながら贈答が続く。最初の季節は年末年始で、道綱母にとって最も幸福なひとときだといわれる箇所である。登子も道綱母も歌の造詣が深く、木彫り人形を用いた歌の贈答を楽しむ。

三月には兼家から登子への手紙が誤って道綱母のもとに届いた。手紙の中身を見ることができたので見てみると、そこには近いうちに登子のもとへいきたいが、「われならで」と思う人が側にいるから躊躇していると書かれていた。「われならで」は『伊勢物語』三十七段にある贈答歌で、

われならで下紐解くなあさがほの夕影またぬ花にはありとも  
（私以外の男に、下紐を解いてはなりません。たといあなたの心が、夕べを持たない朝顔の花のように移ろいやすいものであっても）（福井 1994: 146)

とあり、上の歌は男から女へ贈ったものである。私以外の男には身を許すな、という意味であるが、『蜻蛉日記』ではこれを女（つまり道綱母）の立場に転用したもので、兼家は登子のところにいきたいが、道綱母に嫉妬されそうなので、という諧謔的な引歌である。道綱母はその手紙の端に、いつも浮気をしているのは兼家のほうだという反論を、和歌で小さく書きつける。それをみた登子は、間違っても手紙があなたの方に届いたのは、兄の愛情があなたにあるからですよ、と道綱母の歌言葉を巧みにそらせ、兄の兼家を弁護しつつ、道綱母の心にも優しく寄り添っている。



登子は東宮の母安子が亡くなった後、その母代わりになっている。宮中へ帰る前日、道綱母は登子の対へ出かけていた。ちょうどその時、久しぶりに兼家が道綱母のもとを訪問する。兼家の声を耳にしたのに帰宅するそぶりもみせない道綱母に、登子は坊やが眠たいようですよ、と兼家を幼児扱いする言い方をする。道綱母は登子の冗談に答えて、自分を乳母にたとえ、乳母がいなくても大丈夫です、と返答する。

夜離れをして常に家を留守にする兼家は、たまに道綱母のところを訪れた時、道綱母が不在だと不機嫌になるわがままな態度があった。兼家のまるで子どものような振る舞いを、登子もよく知っているのだろう。二人に赤ん坊扱いされる兼家である。しかし、このように兼家を話題にすることは『蜻蛉日記』全体で珍しく、兼家の妹ということもあるのだろうか、登子とは自然体で話せる仲であることがわかる。

さて、「夢」が登場する和歌の箇所を考察していこう。「夢」がみられる歌は四首。最初は「夢」に関する贈答がおこなわれ、その「夢」から話題が発展していく。

五月に、帝の御服ぬぎにまかだたまふに、さきのごと、こなたになどあるを、「夢にものしく見えし」など言ひて、あなたにまかだたまへり。さて、しばしば夢のさとしありければ、「ちがふるわざもがな」とて、七月、月のいと明きに、かくのたまへり（木村、伊牟田 1995: 157）。

登子は、年末の時と同じように、道綱母の住む西側に下ることを予定していたのに、「夢にものしく見えし（不吉な夢を見た）」と、禍の起きるのを避けるために予定を変更する。どんな「夢」なのか詳細はわからないが、夢解きや陰陽師に相談したところ、何か不吉な前兆らしいものを見たということであろう。しかも一度ではなく、「夢のさとし（悪い夢のお告げ）」は数回続いた。そのような七月のとても月が明るい時に、登子から歌が送られてくる。

①見し夢をちがへわびぬる秋の夜(よ)ぞ寝(ね)がたきものと思ひ知りぬる（不吉な夢の夢違えができずに困っている秋の夜長が、どんなに寝苦しいものか、身にしみてわかりました）御返り、

Senri SONOYAMA

②さもこそはちがふる夢はかたからめあはでほど経(ふ)る身さへ憂きかな (いかにも仰せのとおり夢違えはむずかしいものでしょうが、方違えならおできになりそうなもの。長くお逢いできずに日を過す私までもつらくなってまいります) (木村、伊牟田 1995: 157)。

①は、登子から道綱母に送った歌である。登子と道綱母は目と鼻の先にいるが、不吉な「夢」によって逢うことがかなわない。その不満やもどかしさを訴えた歌。ただでさえ秋の夜長は寝にくいのに、夢違えをして苦しんだ夜はさらに時間をもてあまして、眠ることができない。そのため、道綱母に歌をよこしてきたのである。

②は道綱母から登子への返歌。「さもこそは」は、おっしゃるようにその通りの意で、「さ」は登子の歌を指す副詞である。このままお逢いできないまま日数を重ねると、我が身までも不運であると、登子の嘆きを受け止めた物言いである。すかさず登子から返信がある。

③あふと見し夢になかなかくらされてなごり恋しく覚めぬなりけり (「あはでほど経る」なんて、とんでもない。私は夢でああなたにお逢いしているのです。でも、なまじその夢のために、気持ちがぼんやりとしてなごり恋しく、いまだ覚めやらず、かえって現実にはお逢いできずにいるのです) (木村、伊牟田 1995: 158)。

道綱母が「あはでほど経る (長らく逢わないで日を過ごす)」と詠んだのに対して登子は、そんなことはない、私はあなたに夜な夜な夢で逢っていると答え、かえってその夢の名残から覚めることができずに悲しみにうちひしがれているという。道綱母もすぐに返信する。

④こと絶ゆるうつつやなにぞなかなかに夢は通ひ路ありといふものを (逢うことの絶えている現実は何なのでしょう。かえって夢の中でこそ思うままに逢えると申しますのに、お言葉をうかがいますと、まったく絶望的でございます) (木村、伊牟田 1995: 158)。

④の初句は交際が絶えている意。現実では逢えないが、私のことを思ってくださっているのなら、私の夢の中にも見えるはずなのに、それさえもない、ぜひお越してください、という内容である。先に紹介したように、相手を思うと、その相手の夢の中に現れるという俗信があった。

その後、さらに二首の和歌が続く。登子は道綱母の④番歌「こと絶ゆる」という言い方が気になったのか、すぐに返答している。私たちの関係が「こと絶ゆる」というのは不吉であり、道綱母のもとへ行くことができない、もどかしさを歌にする。それに対して、道綱母も、近くにあなたの住まいが見えるのに、川に隔てられたように伺えないことに心が塞ぎこんでいると詠んでいる。登子は遠く離れ離れになっているが、心だけは淵（水が深く渡れないところ）や瀬（水の浅い渡りやすいところ）も関係なく、あなたのことを慕っていると述べる。

「夢」がみられる①番歌から④番歌まで、そして続く二首は、夜通し歌を詠みあう和歌であった。最初は夢違えのための贈答であったのが、次第に近くにいるのにお互いに逢えない辛さを表す歌となっている。登子と道綱母とのこの一連の和歌の流れについて、恋歌であるようだと述べる解釈もある。

一晩中、眠らずに歌の詠み合いをすることが、「夢違へ」の一つの方法だったのでしょう。でも、仮りに、そのような現実の場を取り去ってみますと、この歌の贈答は、あたかも「逢ふこと」をテーマに詠み合った恋の贈答でもあるかのようです。とりわけ、道綱母の歌は、「逢ふこと」の不可能な身のせつなさをうたって、おぎなりの社交や遊びの歌とはいえない切実さがあるように思います。ここにおいても、彼女は、自らの内に常に存在する思いの真実を、登子との歌合戦という場を借りることによって、かえって、のびのびと歌い表わしているのではないのでしょうか（上村 1986: 476）。

不吉な「夢」という負の様子を契機として、離ればなれになっているお互いの心を確認めあう一連の行為は、確かに恋歌の贈答といってもよいだろう。登子と道綱母は即座に歌をうたいあっていた。常に相手のことを思い続けるからこそその言動であり、現実では逢えな

いの「夢」では逢っている、という転換の方法が二人の絆をより強めていた。

先述したように、『蜻蛉日記』の「夢」は兼家との関係に思い悩むときだけにみられるものであった。今回着目した「夢」の和歌も同様、兼家との関係はうまくいっていないが、登子とのやり取りでは兼家を子どものように扱う二人の会話がみられ、兼家を話のたねに持ち出して茶化すような愉快的様子もみられた。それは兼家の妹、登子との信頼関係によって成り立つ行為であり、特別なひとときをつくり出す。兼家との不和を嘆きながらも、登子との温かい人間関係が築かれていく一連の和歌からは、道綱母の束の間の心の平安がみられるのである。

### おわりに

『蜻蛉日記』の「夢」の和歌からは、「夢」を契機として登子との絆がさらに強まり、コミュニケーションの再構築がおこなわれる姿勢がみられた。兼家との関係に特に進展はない中、常にストレスを抱える道綱母にとって、登子との和歌のやり取りはひとときの心の休息になったのだろう。

小野小町の和歌にみたように、「夢」には相手を思う気持ちによって魂を引き付ける力があると考えられていた。「夢」を用いた贈答歌は双方の心をさらに繋ぎとめる役割を担う。『蜻蛉日記』が「夢」について描く時は、兼家との不和に悩む時ばかりであるが、それは現実から遠ざかりたい証でもあり、「夢」に頼ってもどうにもならない我が身を嘆くことであった。しかし、「夢」を詠む和歌四首は、登子という心から信頼できる相手との応酬であり、道綱母にとっては現実世界における穏やかな生活の象徴となるものであった。

人はなぜ「夢」をみるのか、「夢」がどのように生れるのか、「夢」にはまだ解明されていない謎がたくさんある。それゆえ「夢」は現実とは異なる想像を超えた範疇のものとして考えられ、それらが文芸として表現される時、より幻想的な意味を漂わせることになる。

### 参考文献

秋山虔、上村悦子、木村正中 1969. 「夢合せ（蜻蛉日記注解七十九）」. 『国文学解釈と鑑賞』 34(3): 125-131.

岡一男 1943. 『道綱母』. 東京市：青梧堂.

奥田勲、平野多恵、前川健一編 1995. 『明恵上人夢記訳注』. 東京都：勉誠出版.

木村正中 1959. 「蜻蛉日記本文批判の方法」. 『国語と国文学』  
36(3): 13-26.

西郷信綱 1993. 『古代人と夢』. 東京都：平凡社.

森田兼吉 1995. 「『かげろふ』の夢『更級』の夢」. 上村悦子先生  
頌寿記念論集編集委員会編. 『王朝日記の新研究』. 東京都：笠間  
書院. 361-378.

福井貞助校注・訳 1994. 『新編日本古典文学全集 12 竹取物語  
伊勢物語 大和物語 平中物語』. 東京都：小学館.

犬養廉校注 1982. 『新潮日本古典集成 蜻蛉日記』. 東京都：新潮  
社.

石原昭平 1977. 「閉ざされた夢・醒めた夢—蜻蛉日記」. 『国文学  
解釈と鑑賞』 42(10): 98-103.

柿本奨 1966. 『蜻蛉日記全注釈上巻』. 東京都：角川書店.

金子富佐子 2000. 「遙遠の日記文学、「夢」と「物語」をめぐって  
—『更級日記』における『蜻蛉日記』受容の様相—」. 守屋省吾編  
『論集日記文学の地平』. 東京都：新典社. 238-255.

金子真理子 1979. 「蜻蛉日記と更級日記における夢の差異の考  
察」. 『字部国文研究』 10 卷. 1-14.

木村正中、伊牟田経久 校注・訳 1995. 『新編日本古典文学全集  
13 土佐日記 蜻蛉日記』. 東京都：小学館.

Senri SONOYAMA

大倉比呂志 1990. 「『蜻蛉日記』の夢と信仰」. 石原昭平ほか編『蜻蛉日記 女流日記文学講座第二巻』. 東京都: 勉誠社. 242-257.

小沢正夫、松田成穂校注・訳 1994. 『新編日本古典文学全集 11 古今和歌集』. 東京都: 小学館.

上村悦子 1978. 『蜻蛉日記（上）全訳注』. 東京都: 講談社.

上村悦子 1986. 『蜻蛉日記解釈大成』. 東京都: 明治書院.

山口康子 1998. 「平安和文の「夢」の引用—『源氏物語』を中心に」. 『国語と教育（長崎大学国語国文学会）』 23: 1-11.